

Web 会議ツールを活用した幼児のための指導法 TPR

谷口 征子（小田原短期大学）

TPR Using Web Conferencing Tools for Preschool Children

Yukiko TANIGUCHI, Odawara Junior college

要旨：これまでに日本在住の幼児の日本語能力を高めるために TPR(Total Physical Response=全身反応教授法)を用いた活動を行ってきた。同じ空間の中で顔と顔を突き合わせ空気感を感じながらの活動であったが、**covid-19** による影響で対面での接触が不可能になった。実際に母国に帰省したまま来日できなかつたり、通っている保育施設が休園したりと日本語習得の環境がなくなり、継続した学びが行えなくなってしまうという懸念が生じた。そのため Web 会議ツールを活用し、活動を継続することにした。

本発表においては、Web 会議ツールを活用し、幼児特有の「遊びの中で学ぶ」ことを目的とした日本語学習のために行った TPR の活動について、その方法や効果について報告する。

キーワード：TPR、オンライン、ことば遊び、幼児期、

1. 研究の背景

近年、日本に在留する外国籍の乳幼児数が増加していることに伴い、保育施設での受け入れ数も増加の一途をたどっている。国籍を問わず、外国にルーツをもつ子どもは保育施設では日本語を浴びながら、家庭では母語といった多言語の環境の中で生活している。そのため、複数言語をうまく習得していけば、多言語話者になる可能性がある。そのためには継続した言語習得のための活動が必要となるが、**2020** 年初頭に発生した新型コロナウイルスの影響は外国にルーツをもつ家族にとっても大きなものとなった。人と接することなく学習を行うためには ICT を使うことが容易に考えられるが、動画視聴やスマートフォンのアプリケーションを使うような一方的な活動では子どもの学習動機は弱く、継続した学習が見込めない。双方向で対話をしながら進めていく学習形態が求められる。

2. TPR とは

TPR(Total Physical Response)とは、1960 年代にアメリカの心理学者である Asher, J James によって提唱された指導法である。日本語では「全身反応教授法」と訳されている。教師が目的とする言語（本発表でいう日本語）で指示を出し、その指示に即座に応じて全身で反応するというものである。Asher (2009) は、次の 3 つの原則（発表者による訳）に基づき TPR を考案した。

- ①聴解力は身体の動きを通して伸ばす。
- ②聴解をスピーキングに先行させて十分に行う。
- ③活動に対する心や体の準備ができるまで発話しない。

この指導法は、聴解の活動を、その後続くシャドーイングのような口頭練習に直接結びつけるのではなくて、その前の活動として、話すことよりも理解させることを目的としている。

黒川（2020）は、日本人の幼児を対象に英語での TPR を行った。谷口（2021）は、2人のネパール人幼児を対象にシャドーイングと TPR を行った。

3. 研究方法

3.1 研究目的

本研究は外国にルーツをもつ幼児の言語能力を高めるため、TPR を行い、その効果を検証するものである。小学校入学前の未就学状態である幼児期であることを鑑み、「遊び」を通して心と体を十分に動かして発達上の課題を達成するため、本活動は子どもたちが「楽しい」「もっとやりたい」と思える内容にすることを目標にすすめていく。

3.2 研究対象者

ネパール人の男児Aくんと女児Bちゃん、日本人の男児Cくんと女児Dちゃんの4名であり、同じ保育施設に通っている年少児（3歳児クラス）である。

3.3 本実践で用いる Web 会議ツール

本実践では Google 社が提供する Web ビデオ会議サービスである「Google Meet」を活用する。Google Meet Google は特別なアプリなどをダウンロードしなくてもアカウントさえあれば使えるというメリットがある。

3.4 実践研究の内容

全体の流れは以下の通りである。

- ① Google Meet につなぎ、アイスブレイクとして show&tell（ものを見せながら、それにまつわるトークをする）を行う。
- ② 運動あそびを行い、体をほぐす。ウォーミングアップとして一緒にストレッチをしてから、主活動としてあらかじめ保護者をお願いしていたボールや縄跳び、新聞紙などを使い TPR の活動を行う。
- ③ 「ボールを投げる」と言う場合、「**ボールを**投げる（助詞を強調して）」「**ボールを**投げる（動詞を強調して）」などのように品詞に着目させながら発言する。
- ④ 本活動のまとめとして、「この動きは何ですか」と問い、子どもたちから語彙を引き出す。

- ⑤ 次回に向けた課題（ホームワーク）を出す。

活動の一例（TPR 部分のみ）

教師	「これから体操をします。準備はいいですか。」
教師	「先生と同じように動いてね」 「立ちます」「座ります」「手を挙げます」「ひざを曲げます」 などと言いながら、動作も同時に行う。
子ども	テレビ画面（スマートフォンをつないだ）を見ながら同じ動きをする。
教師	「次は、先生は動きません。やって欲しいことを言うので、やってみてね」と言い、既出の動作をやらせよう。
子ども	スムーズにできる子ども、保護者に助けをもらいながら動作をする子ども、戸惑いながら友達の様子を画面で見ながら動作をする子どもなど。
教師	「次はレベルアップします。難しくなります。みんな、ボールを用意してください」「ボールを投げる」「ボールを（下に）置く」「ボールを回す」「ボールに座る」などボールを使った様々な表現を用いる。
子ども	教師の姿を見ながら真似る。
教師	「先生は動きません。みんな考えて動いてみよう」と言い、上記の既出の活動を指示する。 「今日はたくさん動いたね。どういうのがあったか教えてください。」 と言い、子どもたちの反応を見る。
子ども	実際に動作をしてくれる子ども、覚えている語彙と合わせて動作してくれる子どもなど。
教師	「今日やったことを次にみんなに会った時にまたやらせようので、お母さんやお父さんと一緒にやってみてね。」「次は新聞紙を使って遊ぶので楽しみにしていてね。新聞紙でどういう遊びができるか、教えてね」と言う。子どもに対してであるが、保護者への予告でもある。

4. 本実践研究の結果

本活動は合計 5 回行ったが、子どもたちは全員自分の自宅から（1 回目、2 回目）、ネパール人の子どもたち 2 人は同じ家から（3 回目、5 回目）、全員同じ家集って（4 回目）とそれぞれの環境で実施した。4 回目の全員同じ家に揃って行った活動が一番子どもたちの反応がよかった。保護者から、「活動があることで幼児も保護者も意識的に学ぼうとする機会が得られ、課題があることで継続した学びが得られる」との声があった。子どもたちからは「ボールを投げる」「新聞、破る」など学習した語彙を使った発話が聞かれた。

これまで、対面でなければできないと思っていた活動が Web 上でも可能であることが分かり、今後の展開を考えていくうえで大いに参考になった。

5. 今後の課題・展望

本活動は Web 会議ツールを使い、トライアル的な意味合いで TPR を行った。TPR と幼児教育で行われる運動あそびが似た性質をもっているため、体を動かしながら言語習得につながっていく、この取り組みは継続していきたいと考えている。取り扱った内容については、「家庭にあるもの」「動きが分かりやすいもの」を重視し、実施者である発表者が決めたものである。保育所では、今後大きな行事として運動会や学芸会が開かれる。外国にルーツをもつ子どもにとって、これらの行事は「みんなのまねをする」「意味が分からないまま暗記する」となる可能性が高い。子どもたちに成功体験を味わってもらうために運動会や学芸会を想定した TPR を行い、その有効性について検証していきたいと考えている。

参考文献・資料

James J.Asher.2009. *Learning Another Language Through Actions* : Sky Oak Productions

黒川愛子.2020. 「TPR を用いた子どもたちへの外国語教育」『帝塚山大学子育て支援センター紀要 第 1 号（創刊号）』 PP.29-38

パカーティップ・サクンクルー（編訳）.1991. 「TPR 方式による日本語教育の試み」『世界の日本語教育』 1

谷口征子.2021. 「外国にルーツをもつ幼児の言語能力を高めるための研究 ―シャドーイングと TPR による語彙の習得を目指して―」『日本保育学会第 74 回大会発表要旨集』 演題登録番号 : K000070